

消費は構想力である ■橋爪大三郎

消費の変貌するさまを、よいタイミングで捕らえたのはボードリヤール J. Baudrillard だった。彼の『消費社会の神話と構造』が出たのは、もうかれこれ二〇年近く前になるだろうか。

資本主義社会の仕組みをひとくちで言うとき、みんなの要る物を工場やとめて作り、市場で販売する。その結果、資本も儲かるし消費者もよる。どうも具合にできているのだが、ただ、どこがまずいかというと、生産力がどんどん高度になっていって、みんなの要りそうな物は、もうたいがい行きたつてしまった。そこでは、もうたいがい行きたつてしまった。そこでしようがないから、ガラクタみたいな物を消費者に押しつけて、「君の持つてるのはもう古い、だからこれを買いなさい」とか、うまいこと言う。すると消費者の方でも、なんだかとてもよいもののような気がして、ついつい買ってしまふ。どうも最近、そうなるんじゃないか。——こういうことを、ボードリヤールという人が言っていたのだ。

これはまあ、いいところを衝いているし、資本主義批判としても興味ぶかい考え方なので、ひとしきり話題となった。言いだした本人も気をよくして、その先をいろいろふくらませたりしている。で、消費を論ずるといえばこんなスタイルで、つまり、物ではなくて記号の時代だとか、商品Aと商品Bの差異の戯れみたいに議論しないと、時代遅れでないかい？ と言われてしまう昨今の風潮だったので、ちょっと待って。ほんとに、消費が差異の戯れということではないだろうか。私はそんなのじゃなく、むしろ別の線を追えると思うので、議論を逆もどらせてみましょう。

■
ボードリヤール
Jean Baudrillard (一九二九—) フランス生まれ。社会学者。

『ザ・トレンド 88』村上陽一郎ほか

(株)ユー・ピー・ユー pp.402-407. 1987年10月刊

ボードリヤールの言いは一応、資本主義の古典的経済学説を踏まえている。で、その学説に何と書いてあるかというと、社会というのは単純に考えて、生産者(企業)と消費者(家計)の集まりである。財のほうもそれに応じて、生産財/消費財と二分できる。これはもちろん抽象だけれども、資本主義社会における財(事物)のあり方の分析として、それなりの説得力がありました。つまり、生産(資本)の領域では、あらゆる事物が利潤をめざして配列される。いっほう消費の領域では、効用(めいめいの満足)をめざして配列されるだろう。ボードリヤールは後者の、効用なるものが解体してしまった(否、むしろ、資本によって生産されるようになってしまった)からには、資本主義の変質はま

ぬがれないじゃないか、と噛みついたわけだ。(資本の論理のほうは、特に変化したと考えると、いらしい)なぜこれがいけないかというと、そもそも消費と分離した生産のシステムは、操業水準を自分で決定できなくて、外部を必要とする。外部とは消費(を支える効用)です。だから、この効用が壊れてしまえば、資本主義的生産のシステム全体が正当化の支えを失い、悪に染まって奈落に転落するに決まっている、というわけ。(なんともカソリック的発想ですね。)

でも、われわれの社会には、企業や消費者だけじゃなく、国家とかまだいろいろあるわけですよ。この辺にも話を拡げると、どうなるのか。順に考えてみよう。

まず、生産と消費は、いつごろから分離したのか？ 考えてみると、あまり古い話ではなさそうだ。マニエフアクチュアが興る以前の中期では、ちっとも分離していなかった。それどころか、『マルサの女』(観ましたか?)に出てきた横丁スーパのおかみさん、うちの店の惣菜を夕食のおかずにしてどこが悪いのヨ、といきまいてたけど、こんなふうにいまでも分離してこなってる人、結構いるんです。それはともかく、企業と消費者(家計)の分離をバネに、資本主義は離陸を果たした事になっている。

さてこうして、企業と消費者が市場で向きあうわけだが、そこにはまだ、国家(政府)なんぞという大物も実は控えていて、税金を取ったり物を買ったりしているわけです。政府を、経済の見地からどう理解すればいいか？ これには諸説あって、①まったく無視してよい・無視すべきだ、②いや、公共事業の主体・経済行政の主体として無視できないとか(たとえばケインズ派)、③いやいや、国家こそ、市場の無秩序にどうにかわる経済の元締めになつてもらいましょうとか(計画経済派)、なかなかうるさい。ただ

この半世紀ほどは、国家の経済活動抜きに資本主義がにっちもさっちも行かないことがますますすはつきりしてきたというのが、動かぬ大義なのでして。

消費は差異の戯れ、説は、ケインズ以来の「有効需要政策」の行き詰まりあたりがどうも出どころらしい。高度成長、大量生産・大量消費の頭打ち。投資の方向を見失い、行きどころをなくした流動資本が苦しまぎれに、変わり栄えない商品にささやかな差異をまぶして流通の場に客場させ、わずかでも他の資本を出し抜こうとする。

とすれば、消費社会は、「来るべき社会の雛形」でもなんでもあるまい。資本主義経済が一時落ちこんだエア・ポケット・袋小路のようなものだ。

商品のあいだの差異を問題にするのは、消費者

側の選択である。消費者の選択性が高まっているのは、要するに、消費が過小(供給能力が過剰)だからだ。このぎくしゃくは、分離した生産と消費のあいだの、一種コミュニケーション・ギャップみたいなものである。内需を拡大したりして、当面、ギャップをどうにか埋めようとするのは、まあよい。しかし、生産と消費を区画する制度的な線引きにもそろそろ手を付けておかないと、資本主義そのものが行き詰むのは目に見えていますよ。

構造不況とハイテク化の同時進行。資本主義がもうひとまわりの脱皮をはかって苦しんでいる。これが『差異の戯れ』の背後で、いま起こっていることではないか。いくつかさの兆候を読み取ってみましょう。

消費思想—文化—

最近アメリカがへばってきている。巨額の軍事費に首が回らなくなっているのも、一因だ。世界の海に軍艦を浮かべ、飛行機を飛ばすのもやっとな。ソビエトのほうもつとへばっているらしいのが、せめてもの慰めである。

軍事費だって、もとをただせば税金です。企業も家計もなげなしを払っているわけで、日本を横目で眺めてはいまいますく思うのも無理ない。本当は研究開発投資などに回したいのである。

払えばなしの税金に比べれば、研究開発投資はまだましだ。新製品が開発されて利潤があれば、そのうち資金が回収できるかもわからないし。けれど、あんまり基礎的な研究(たとえ

「マルサの女」
 伊丹十三監督、八七年の確定申告の季節に討ちられた、税金をテーマにした喜劇。マルサと何れかの差定の差定の喜劇。主演：宮本信子、山崎賢、津川雅彦。

消費は差異の戯れ、説は、ケインズ以来の「有効需要政策」の行き詰まりあたりがどうも出どころらしい。高度成長、大量生産・大量消費の頭打ち。投資の方向を見失い、行きどころをなくした流動資本が苦しまぎれに、変わり栄えない商品にささやかな差異をまぶして流通の場に客場させ、わずかでも他の資本を出し抜こうとする。

とすれば、消費社会は、「来るべき社会の雛形」でもなんでもあるまい。資本主義経済が一時落ちこんだエア・ポケット・袋小路のようなものだ。

商品のあいだの差異を問題にするのは、消費者

ば高エネルギー物理とか)は、とうぶん海のものとも山のものともつかないから、やっぱり政府が税金で面倒をみてやるしかない。軍事費とだんだん似たようなことになっている。いま経済の営みを、市場を通して人的・物的資源を配置する同時決定(相互承認)だと考えてみよう。資本の活動は、消費者に事後的に承認(購買)されることをあてにして、ひと足先に資源を市場で調達し、それらを配列することにほかならない。すべてこの古典モデルで片付くなら、世話はない。どんなに巨大な設備投資だろうと、結局は消費者のための前払い(消費の後払い)と考えて、さしつかえない。ところが、国家のまかなう軍隊やら開発援助やらは、この枠には収まりきれない。なにがなせ人びとは、税金なるものを支払うのだろうか?

古典的に考えようとする、税金は国家のサーヴィスの購入代金、となる。なるほど、そういう側面もあるでしょう。しかし税金は、使途に関係なく、いつべんにとられてしまう上に、払わずにすまずわけにもいかない。公共サーヴィスの市場があつて、……と考えるわけにはいき

にくいのです。

国家は、家計や企業とまた違った経済主体である。つまり、国家は誰かの代理でなく、独自の見地から物的・人的資源を配列するのだ。われわれの経済は、ますます多くをこうした配列に依存するようになっていく。税金を払うとき、そのことを思い知るべきでした。

なぜ社会・経済は休みなく拡大し続けるのだろうか。そのわけは、あんまりよくわかっていない。ただ最近、その最大の牽引車となっているのが、科学技術の革新なのは確か。

資本主義が順調に発展するためには、わりにこまめな手人が必要です。資本主義世界のリーダーは、このあたりの基礎的な条件を整えないといけない。アメリカはその辺を心得て、戦後四〇年頑張ってきた。その前は、イギリスだって頑張っていた。そろそろ日本も出番じゃないか

というのが、アメリカのイライラの原因である。ところが日本には、生憎コスト意識がまるでない。アメリカに入会権でも持っているつもりでいる。高度成長のあいだはさんさん技術供与をうけ、最近是对米黒字で研究開発をまかなう。昔は日本も、国家なしに夜も日もあけぬ資本主義をやっていた。高度国防国家とか、「欲しがりません、勝つまでは」とか。それなのに敗戦このかたすっかり懲りてしまい、算盤にも胃袋にも結びつかない財の移転がすっかり理解できなくなっているのです。

古典資本主義は、商品の所有権を中心に構成されているわけですが、情報や知識の生産はどうもそれとなくならない。にもかかわらず、資本主義の明日、先端技術の展開は、これにかかつて

消費思想—文化—

いるのです。だから国家といわず財団といわず、採算のうるさくない資金パイプの後押しがますます重要になる。同じ消費の拡大をはかるのも、個人消費を刺激する(減税)とか、土木工事をじゃんじゃんやるとかいった昔ながらの方法に、限界のあることは明らかだ。人間・財・知識の配列に関わる文法が、急速に変化し始めている。個人(の満足)を焦点とするのでもなく、利潤を目的とするのでもない、広大な中間領域にまたがる資源の配置。さしあたりこれを、ネットワークと呼んでみよう。この領域をどう、既存の市場システムのあいだに織りこんでいくか。その構想力が、これからの消費を規定するのだ。

1948年生まれ。東京大学大学院卒業。著書に「仏教の言説戦略」勁草書房、他がある。